



Title	コンピュータの定義からみる日本語の断定の助動詞
Author(s)	中村, 真衣佳; Nakamura, Maika
Citation	研究論集, 21, 1 (左) -19 (左)
Issue Date	2022-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.21.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84006
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_rjgshhs_21_p001-019_l.pdf



コンピュータの定義からみる日本語の断定の助動詞

中 村 真衣佳

要 旨

本稿では、一般言語学における伝統的なコンピュータの定義が日本語の指定・断定の助動詞と呼ばれる形態にも整合するか否かを検討した。その結果、「である」「だ」「です」のコンピュータ機能が希薄である一方で、「なり」は現代語よりもコンピュータの定義に近いことを指摘する。「主語と(動詞以外の)述語を結ぶ連結語(Pustet 2003)」「コンピュータはどのような意味内容も加えない(Narahara 2002)」というコンピュータの機能にもとづき、「なり」「である」「だ」「です」を検討したところ、以下の結論に至った。連結機能については、構造的な統語的連結が中心的機能ではなく、主語と述語を意味機能的に結ぶことを指摘した。また、コンピュータはどのような語彙的な意味内容も加えないという定義に関しては、古代語と現代語とでは振る舞いが異なる。「なり」は、述語に意味内容を加えない点でコンピュータの定義と整合するが、現代語は、文体、話し手の心的態度、丁寧さや敬意といった社会言語学的要因を背景に形態の多様化が進んだことで意味的、語用的機能が生じていることを指摘した。したがって、現代語は古代語よりもコンピュータ機能が希薄化したと結論づける。

1. はじめに

本稿は、一般言語学におけるコンピュータの伝統的定義が国語学、日本語学において繫辞¹と呼ばれてきた「なり」「だ」などの類にも整合しているかどうかを検討するものである。

‘A is B’で表されるコンピュータ文は、主語 A と述語 B の関係が A=Bであることを意味する同定文²であると考えられている。その影響で日本語の「AはBだ」をコンピュータ文と呼ぶことが

¹ 「繫辞」という用語は、ラテン語の‘copula’の訳で、速水滉 1916年『論理学』の「繫辞は主辞と賓辞を連結する作用を為すもので」に初出がある(小学館『日本国語大辞典第2版』(第4巻)2001, 日本国語大辞典第2版編集委員編)。

² 例えば、Tom is chairman of the committee. 「トムはその委員会の議長だ」という文は、Tom と (the)

多いようである。しかし、実際には日本語の「AはBだ」が表す意味は、同定文に限らない。「ボクハウナギダ」(奥津1978, 1983)に代表されるように多義的である。「ボクハウナギダ」という文は、「ボクハウナギが食べたい」とか「ボクハウナギを注文する」とかの意味だと普通は考えられる(奥津1978: 11)。奥津(1978)は、日本の文法家に「だ」を繫辞(copula)とする者がいることに関して、「だ」は西洋文法の枠組みでは到底説明がつかないと指摘している(奥津1978: 10)。しかし現状は、「繫辞はコピュラに相当するものである」というように繫辞とコピュラが同等に理解されていることが多いように見受けられる。繫辞はcopulaの訳語という点から見れば、繫辞とコピュラを同等に捉えることも無理はない。しかし、日本語の文法記述においては、この点に関して再検討することでより精密な記述が可能になると考えられる。

日本語では、コピュラや繫辞と呼ばれる形態は通時的に変化してきた。代表的なものは古代語「なり」「たり」、現代語「である」「だ」「です」³である。現代日本語を共時的に見ると、複数の形態が共存しているが、これは、英語のbe動詞が文法範疇としての人称、数、時制などで語形変化することとは性質が異なる。日本語には、文法範疇としての人称、数、時制は存在しないが、複数の形態が範疇関係(paradigmatic relations)を成して共存する。

通言語的にコピュラを観察すると、ロシア語⁴のようなコピュラを省略するゼロ形式を認めた場合に、コピュラは普遍的言語要素⁵とみることができ、品詞設定は個別言語ごとに異なる。西欧言語では英語のbe、ドイツ語のsein、フランス語のêtreがコピュラに相当し、動詞として扱われている。その一方で、日本語の「なり」「だ」などは一般的には指定・断定の助動

chairman of the committee という2つの名詞句の指示する対象が同一であることを意味し、Mary is pretty. 「メリーは美しい」は、prettyという形容詞によって指示される対象の集合にMaryという名詞句によって指示される対象が含まれることを意味している(三省堂『言語学大辞典』第6巻(術語編)1996, 亀井孝・河野六郎・千野英一編)。

³ 形態論的な議論に基づくと、これらは活用体系を成すと考えられほかにも活用形態が存在しているが、本稿ではこの問題に立ち入る余裕がないため、別稿で改めて議論する。また、活用形態以外にも「じゃ」「や」など地域方言に残存する形態や、近世以降の「でやんす」「でげす」、現代語でも使用される「であります」「でございます」などもある。

⁴ ロシア語はМосква город「モスクワは都会だ」のようにコピュラを省略する方が普通である(三省堂『言語学大辞典』第6巻(術語編)1996, 亀井孝・河野六郎・千野英一編)。

⁵ コピュラ(繫辞)について、春日(1968)が泉井久之助(編)『世界の言語』を参照してまとめているところによると、印欧語系では、ロシア語の如く繫辞を通常用いない構文のものがあり、セム・ハム語系についても同様である。アルタイ語系ではチュルク諸語の如く、繫辞構成の発達が遅れ、特殊な方法以外に見るべきものを持たぬというようなこともある。反面、蒙古語、ツングース語のように、よく発達したものもある。マラヤポリネシア系言語では、繫辞構成の語が元来なく、後に英語等の影響を受けて用いられるようになった。また、トラック語のように指示語が発達したものもある。中国語の「是」はこれに似ていて、日本語の古代語「ゾ」にあたるものである。繫辞の有無、発達はずしも語族間において一定しているものではない(春日1968: 165-164)。

詞に分類される。

また、類型論的な観点からみると、コンピュータに相当する言語要素が出現可能な統語的位置は個別言語で異なるため、自ずと機能的差異が生じることも予想される。奥津（1978）も指摘するように、「なり」「だ」の類を西欧文法の枠組みで整理するには不都合なことが多い。また、高橋（2005）は、日本語のコンピュータは名詞を述語にするために組み合わせる補助的な単語であるが、動詞や形容詞の述部を一定の述べ方にするために組み合わせられると述べており、用法自体さまざまな捉え方がなされているというのが現状である。

本稿では、日本語における古代語の「なり」と現代語の「である」「だ」「です」がコンピュータの定義と整合しているのかを検討し、「だ」「である」「です」のコンピュータ機能が希薄であること、一方で、「なり」は現代語よりもコンピュータの定義に近いことを指摘する。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では先行研究として古代語の「なり」「たり」と現代語の「である」「だ」「です」の形成過程、品詞分類について概観する。第3節では、コンピュータの定義を確認し、日本語の「なり」「だ」などの類がコンピュータの定義に合致しているのかを検討する。第4節では、日本語の指定・断定の助動詞がコンピュータの定義と整合しない要因を検討する。第5節は、結論である。

2. 先行研究

2-1 「なり」「たり」の形成

「なり」「たり」は、助詞「ニ」と「アリ」、「ト」と「アリ」が融合して約まったものが「なり」「たり」となってできたものである（大槻 1897, 山田 1941）。大槻（1987）は「なり」について「指定解説スル語ニテ、意義ハ「にて、あり」（大槻 1987：90）」、「たり」については「意義ハ「にて、あり」ト指定スル語ナリ。（大槻 1897：90）」と述べている。山田（1954）によると、「なり」「たり」はともに名詞を承接するが、意義上の差があり「なり」は内面的にして主に断定を表し、「たり」は外貌的にして主に資格、状態を表す。この区別は「に」と「と」の区別に基づくものである（山田 1954：100）。そして、「たり」は平安時代、和文に使用されることはほとんどなく、主として漢文訓読調の文章、軍記や説話に用いられ意味上、特定の資格を表す語につくことが多い（永井 2015：67）。このような状況で、「たり」は「なり」よりも使用頻度が低く徐々に衰退したが、「なり」は広く用いられ現代短歌でも使用頻度の高い助動詞である（今野 2007：178）。

また、山田（1954）は、口語において「たり」は用いず、「なり」は、未然形「なら」が特別な場合に「なれ（ば）」となること、連体形「な」が古く終止形に用いられたこと、命令形がないことなど文語と異なる用法、活用を持つことを指摘する。

なお、「なり」という形態には断定以外に推定伝聞を表すものがある。これらは、主に承接に

より区別され、伝聞推定の「なり」は証拠性を持つものと考えられている。この2つの「なり」は、江戸時代以来、詠嘆の意を表すものとされてきた「なり」が推定伝聞の意を表すことが松尾捨治郎氏⁶により明らかにされたことで、終止形接続の「なり」が推定伝聞、連体形接続の「なり」が断定（および存在）を表すことが明らかになった（岡崎 1989）。しかし、終止形接続「なり」は鎌倉時代以降に文語化して衰退する（永井 2015）。

2-2 「である」「だ」「です」の形成

現代語の「である」「だ」「です」は、助詞「デ」と存在詞「アル」の合体、融合、音韻的縮約を繰り返して生じた。松尾（1931）によると、「である」は、「なり」「にあり」「にてあり」「である」の順序で形成されたものであり、「である」が直音に約まったのが「だ」で、拗音に約まったのが「ぢや」、柔らかい音になったのが「や」である（松尾 1931：111-112）。

また、山田（1954）は「である」について、「で」と「ある」との連語にして各その固有の性質と意義とを以て用ゐらるるものにして説明陳述の用をなす（山田 1954：102）」と述べ、「だ」は「である」が約まったもので関西地方では「ぢや」と言うと言っている。山口（2002）は、断定の意を表す「である」は「にて」が「で」に変化するとともに「あり」が連体形の終止形同化により元の連体形「ある」に変化した形で、室町期に「である」が「ぢや」を経て「だ」に変化したと述べる。

また、「です」の形成について、青木（2020）によると、「です」という形の初出は狂言資料であり、話し言葉を意図的に書き残した「名ノリ」の場面に限定されている。青木（2020）は、「です」には中世後期のものと近世中期～後期（18世紀頃）の女性語としての「です」があり、前者は、「でさふらふ（候）」起源であるのが定説であるが、後者は「ござります」起源説と「であります」起源説のどちらであるか未だ明確にはなっていないと述べている。

2-3 断定を表す形態の品詞分類

本節では、各文法論における品詞分類を概観する。品詞をどう捉えるかは、各文法家に共通する点と異なる点がある。この問題について議論する必要もあると思われるが、本稿ではこの点には立ち入らず、「だ」「である」「です」などが日本語文法体系においてどのように分類され、位置付けられてきたのかについて確認する。

文語「なり」「たり」は、大槻（1897：89-90）が事物を指し定める意味を持つことから指定の助動詞とすると述べ、時枝（1954：119-123）も同様に指定の助動詞としている。

「だ」は、橋本（1979）では形容動詞語幹の活用語尾、ならびに、断定の助動詞として品詞分

⁶ 松尾氏の所説としては、「小疑三東」（『國學院雑誌』第二十五卷第八号・大正八年八月刊）に、「終止段所属のなりは果して詠嘆か」といふ題で述べられたものが最も早い（岡崎 1989：18-19）。

類しているが、時枝（1978）は形容動詞を立てずに「だ」を一括して指定の助動詞としている。また、時枝（1978）では、指定の助動詞は、話し手の単純な肯定判断を表す語であるとし、従来は助詞である「に」「と」「の」には明らかに陳述性があると述べ、「だ」の活用形態に取り入れている（時枝 1978：155）。

以上のように、「なり」「だ」の類を助動詞として扱う文法家がいる一方で、独自に用語を設定して品詞分類をする文法家もいる。

松下（1924）は、言語構成の3段階として、断句、念詞、原辞を設定している。断句とは、説話の単位で断定を表すひと続きの文のことであり、念詞（詞）とは単独で観念を表す断句の材料であり、原辞（辞）とは念詞をつくる材料である（松下 1924：48-52）。松下（1924）はこのような枠組み（原辞論）中で、「なり」「たり」「だ」「です」「ます」などを活助辞に位置付ける（松下 1924：102-112）。活助辞は、原辞の下位分類である完辞（そのままひとつの念詞になるもの）と不完辞（そのままひとつの念詞にならないもの）のうちの不完辞の1つである第一不完辞に属するものである。第一不完辞には、一般的な形式的意義を表す助辞と特殊的形式的意義を表す接辞がある（松下 1924：64）。さらに、助辞のうち他の完辞⁷の下へ附くものを尾助辞とし、そのうち活用があるものを活用辞、活用がないものを静助辞と言い、静助辞は「てにをは」に相当する（松下 1924：102）。活助辞は一般的な品詞分類でいうと、助動詞に近い概念であると考えられることがあるようである。しかし、松下（1924）は、活助辞は多数の文法家により助動詞と言われているが、助動詞は英独文法教授のための西洋文典（Auxiliary verb）の訳語であるから活助辞を助動詞というのは不相当であると述べる。したがって、松下の活助辞を含む原辞は、一般の品詞分類とは異なる次元で語られていると考えられる。

松尾（1931）も「なり」とその同類語について、助動詞の中に入れるのではなく、不完全動詞と名付け、その理由を他の動詞のように文の最初に用いられない語であるからと述べる（松尾 1931：108）。その後、山田（1954）も、「たり」「なり」「である」「だ」「です」を用言とした上で独自の名付けをし、「他語を伴ひて説明の用に供する働を有するが故に今之を名付けて説明存在詞といふ（山田 1954：99）」と述べているように存在詞の一種として位置付けている。

三上（1972）は、7つの自立語と2つの附属辞（助詞・準詞）から成る9品詞をたてている。これは、西洋の8品詞に準品詞ともいうべき準詞を設けたものであり、狭義の接尾辞が単語を作るのに対して、準詞は広義の接尾辞に相当し文を作る点が日本語の特徴である（三上 1972：73）。三上（1972）では、「ダ」「デス」は活用語尾であり、名詞や副詞に対しては準用詞であるとする（三上 1972：97）。

以上のように、これまでの議論において、接辞とみなす立場（松下 1924, 三上 1972）と用言

⁷ 松下（1924：63）は、完辞は一面において同時に念詞であり、「酒」「水」「見る」「聞く」「遠し」「近し」「寧ろ」「嗚呼」「親子」「日月」「往来」などの類がその例であると述べている。

とみなす立場（松尾 1931, 山田 1954）があるのだが、松下（1924）の活助辞、松尾（1931）の不完全動詞、山田（1954）の説明存在詞、三上（1972）の準用詞は、一般化することはなかった。橋本文法が基盤である学校文法の影響もあると推測されるが、現在でも一般的に指定・断定の助動詞と呼ばれることが多い。本稿では、「なり」「たり」「である」「だ」「です」を便宜的に断定の助動詞と呼ぶことにするが、指定か断定か、また、助動詞と呼ぶにふさわしいかどうかについては、検討の余地があるため別の機会を設けて検討する。

3. 伝統的コピュラの機能と断定の助動詞の整合性

3-1 コピュラの一般言語学的定義

本節では「コピュラとは何か」について一般言語学における伝統的な定義の確認をする。‘Copula’は、link（連結する）を意味するラテン語である（Narahara2002:16）。一方、「繫辞」について、春日（1968）では、語を提示してその概念に叙述または陳述性を付与し、係助詞ハ（時に省略される）を伴う主辞（主題/主語）に対する賓辞（述語）を構成すると説明している（春日 1968:151-152）。両者の定義は、結ぶという点で共通しているかのように見える。

Narahara（2002）は「コピュラ」という用語は、言語学だけでなく哲学、論理学にも見られることに触れ、これら各学問分野に共通するコピュラの定義を次のように示す。

- A) A word that links a subject and a predicate.
- B) A verb used to link a subject with a non-verbal predicate.

(Narahara2002:16)

また、Pustet（2003:2）はコピュラの機能を3つ挙げている。1つは、‘the function of a linker between subject and predicate.’である。2つ目は‘the function of a syntactic ‘hitching post’ to which verbal inflectional categories can be attached.’である。3つ目は‘the function of a predicator which is added to lexemes that do not form predicates on their own.’である。1つ目の機能としては、(1)にあるように、連辞関係（syntagmatic relations）の観点からみて‘I’と‘a Japanese student’を連結させる機能をbe動詞の‘am’が担っていることを示すと考えられる。

2つ目の機能としては、(2)のような‘surprise’が語形変化（屈折）した‘surprised’に付属するbe動詞の‘was’の例が考えられる。3つ目の機能は、(1)(2)のbe動詞‘am’‘was’が意味論的な意味を持たないことを示していると考えられる。

- (1) I am a Japanese student.
- (2) I was surprised.

次に、述語の品詞に注目する。英語の *be* 動詞と中国語の「*shì* (是)」では、Pustet (2003) が指摘するように、英語は (3)(4) のように主語と名詞述語、形容詞述語を結ぶ機能を持ち、(5) のように動詞述語文に *be* 動詞は現れない。中国語は (6) のように主語と名詞述語を結び、動詞述語文に「是」が現れないのは英語と同様だが、(7) のように形容詞述語を結ばないのは英語と異なる。

- (3) this is a cup.
- (4) this cup is full.
- (5) this cup broke.
- (6) Dà-míng shì lǎoshī.
Dà-míng is a teacher.
- (7) Dà-míng hěn gāo.
Dà-míng is very tall.

(Pustet 2003 : 2-3)

- (8) * this a cup.
- (9) Dà-míng lǎoshī

英語の *be* 動詞や中国語の「*shì* (是)」が、連辞関係 (syntagmatic relations) の観点からみて主語と述語の間に位置し、この言語要素がなければ英語の場合 (8) のように非文となり、中国語の場合は (9) のように「Dà-míng 先生」という意味の名詞句を形成する。したがって、英語の *be* 動詞や中国語の「*shì* (是)」は先に挙げた Narahara (2002), Pustet (2003) のコンピュータの定義・機能として記述されている「主語と (動詞以外の) 述語を結ぶ」ということに合致している。

3-2 連結機能の検討

本節では、日本語の断定の助動詞の連結機能について検討する。1つ目の機能である、‘the function of a linker between subject and predicate.’について検討する。日本語の「なり」「だ」などの断定の助動詞とされているものは主語と述語を繋いでいるのだろうか。

古代語の「なり」、現代標準日本語の「だ」は、終止形の場合 (10) (11) (12) に示す通り統語的には名詞述語文の述語に含まれ、線状的な連辞関係の観点からみると文末に位置する。したがって、英語と中国語において主語と述語の間に *be* 動詞や「是」が位置するのは異なる。

Narahara (2002), Pustet (2003) の定義においては、「繋ぐ」ということを意味的にみているのか、構造的にみているのか、定かではない。もし、構造的に繋ぐと解釈するなら、「だ」「なり」はコンピュータと呼べないことになる。日本語では、意味的に繋ぐと捉える方が妥当であると

思われるが、本稿では構造的な検討と意味的な検討を行う。西欧文典の枠組みを国語学・日本語学に当てはめる場合の齟齬はこのように生じるという一例であるといえるが西欧言語を考える上では、SVOの語順により構造的に繋ぐと考えることが可能であり、構造と意味のどちらで繋ぐのかについて議論する必要性もないであろう。しかし、日本語のようにSOVの語順を持つ場合に、構造的に繋ぐのか意味的に繋ぐのかという問題が発生する。このこともコンピュータの定義を基準にして日本語を説明することが日本語の実態にそぐわない傍証となっている。

(10) おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。『竹取物語』

(11) 彼が学生 {だ/である/です}。

(12) 外がとても静か {だ/である/です}。

3-3 承接可能な品詞

承接に目を向けると、「だ」「である」は、(11)(12)に示すように、名詞や形容動詞語幹を承接するが(13)に示すように形容詞を承接できない点は、英語と異なり、中国語と共通している。「です」は形容詞を承接することができる点で、英語のbe動詞に近似している。

動詞の承接に関して、古代語「なり」は名詞に承接する以外に、動詞の連体形に承接することを先行研究で確認した。動詞の連体形は体言相当と捉えられていたため、このような承接が可能となるが、近世から明治時代の(14)(15)では終止形を承接している。現代語の「だ」は、一部の地域方言(東山方言⁸)において終止形を承接する「行くだ」のような使用が残存しているが、標準語には存在しない⁹。

(13) 外はとても涼しい {*だ/*である/です}。

(14) 柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺 正岡子規

(15) 夢の夢こそあはれなれあれ数ふれば、暁の七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の鐘の響きの聞き納め寂滅為楽と響くなり。近松門左衛門(1703)『曾根崎心中』日本語歴史コーパス、下線は引用者

断定の助動詞が承接する要素を品詞で整理したものを表1に示す。表1は、日本語の断定の助動詞は「なり」と「である」「だ」「です」すべてにおいて、be動詞と異なる承接関係を持ち、

⁸ 東山方言(長野、山梨、静岡で話される地域方言)

⁹ 「です」は近年用法の拡張がみられる中で、動詞を承接する場合があります、役割語として使用される例がある。「タローは、ずっと、ず〜っとボクの側にいるです。」六堂葉月(2002)『ケダモノは二度笑う』現代書き言葉均衡コーパス、下線は引用者

唯一「である」が中国語の「是」と共通していることを示している。動詞を承接できる「なり」「です」は、‘A verb used to link a subject with a non-verbal predicate.’ (Narahara2002 : 16) という定義から外れる。

表 1 断定の助動詞形態が承接する品詞

承接要素の品詞	だ	である	です	なり
名詞/形容動詞語幹	○	○	○	○
形容詞	×	×	○	○
動詞	○ ¹⁰	×	○	○

3-4 構造的連結と意味的連結

本節では日本語の「なり」「だ」の類が主語と述語をどのように結んでいるのかを検討する。(16ab) は名詞に「だ」が後接している述語と主語の位置を入れ替えた例である。(17ab) は述語の「だ」を削除し主語と述語を入れ替えた例である。これらはどちらも日本語として成立する。(11) の名詞述語文においては「だ」が文末の述部に位置し、主語と述語を結ぶ機能が線状的な位置関係上に現れていない。しかし、コンピュータの定義を線状的に捉えて、(16b) のように主語と述語を前後で入れ替えてみると、線状的に主語と述語を結ぶ構造であり、かつ、解釈が可能である。したがって、「だ」が主語と述語を結んでいるとみることも可能である。ところが、(17ab) のように「だ」を削除しても解釈が可能であることを考慮すると、「だ」が必ずしも構造的に主語と述語を結んでいるとは言い切れない。上代の指示表現の発生は、文末陳述辞を全然欠く指定法「体言+体言」或いは「体言+ハ+体言」からはじまったという春日 (1968 : 162) の記述から推察すると、日本語の名詞述語文は必ずしも断定の助動詞を要求しないとも考えられる。また、山田 (1936) は「思想を發表せること明かなれば、文といふに差支えなきなり (山田 1936 : 913)」と述べ、犬が突然襲いかかってきた時に発する「犬!」、火事の発生を告げる「火事!」のようなものも文であると認めている¹¹。

(17ab) が解釈可能であることは、日本語の「だ」は必ずしも文中の主語と述語を結んで文を成立させ、意味を解釈するために必須の要素ではないことを示唆している。

- (16) a. あれは、何だ?
b. 何だ? あれは、

¹⁰ 一部の方言のみで可能

¹¹ 他にも「犬!」「火事!」といった一単語を文の成立として認める論考に、渡辺 (1971)、南 (1993)、石神 (1994) などがある。

- (17) a. あれ, 何?
b. 何? あれ,

(17ab) のような断定の助動詞がゼロ化する例において解釈が可能となるのは、主語と述語を結ぶ標示を担う要素が、断定の助動詞だけでなく、「が」や「は」といった助詞や発話上のポーズも担っているためであると考えられる。しかし、この問題については別稿で改めて詳しく議論する必要がある。本稿の目的は、コンピュータの定義と断定の助動詞の整合性を検討することであるため、日本語の断定の助動詞は、主語と述語を結ぶ以外に中心的な働きがあることが予測できると述べるに留める。

次に、日本語の断定の助動詞が持つ機能について考えておきたい。「なり」の平安時代の用例を考察すると、(18)(19) にみられるように「なり」で構成されている述語の主語（この場合は主題）にあたる要素が、当該文の外側に存在している。(20ab) に関しても、同様のふるまいが可能である。このことは、日本語の断定の助動詞は、1つの文中の主語と述語を結ぶというより、1つの文の内部に主語がない場合、先行する文中の主語（主題）となる要素を当該述語の主語（主題）として、指定、或いは、同定する機能を持つと考えられる。日本語の名詞述語文は、同じ文の内部に必ずしも主語となる要素があるとは限らない。また、これは、先に述べた一語文においても同様である。このことから、コンピュータの主語と述語を結ぶという定義と日本語の断定の助動詞の働きの実態が整合しない。

(18) おのが身は, この国の人にもあらず。月の都の人なり。(10a) 再掲 下線は引用者

(19) かの都の人は, いとけうらに, 老いをせずなむ。思ふこともなくはべるなり。

『竹取物語』下線は引用者

(20) a. 大家さんはおいしい料理をご馳走してくれます。プロの料理人です。

b. 大家さんはおいしい料理をご馳走してくれる。プロの料理人 {だ/である}。

3-5 断定の助動詞の連用形「に」「で」の場合

次に、断定の助動詞の活用形態について検討する。断定の助動詞の活用形態に関しては、別途議論する必要があるが、本節では、「に」「で」を「だ」の連用形と考える時枝 (1950) 以降の考え (寺村 1984, 加藤 2006) を踏襲して議論を進める。

日本語の断定の助動詞「なり」「だ」が活用することも視野に入れると、これら言語要素が主節末に現れる場合のみではなく、従属節や文中に現れる場合も検討する必要がある。山口 (2002) は、助動詞「なり」の連用形「に」には上代・中古に (21) のような中止法として他の句や用言と相関する連用法と言えそうな例が認められることを指摘している。現代語にも文末に「だ」の連用形「で」を用いた言いさし文と考えられる (22) のような表現が見られる。こ

のような事例は、文が未完結であることから主語と述語を結ぶとは考えにくい。

(21) 春は萌え夏は緑に〈緑丹〉紅のまだらに見ゆる秋の山かも 『万葉』・10・2177¹²

(22) すごい先生が親切にというか、熱心に、事前指導とか事後指導とかしてるみたいで。

「名大会話コーパス」下線は引用者

また、「だ」の連用形「で」には、(23)のように「で」を伴う構成要素が文末に現れ、かつその構成要素を(24)のように文中に戻せる後置文と呼ばれる例がある。この場合は、「で」が承接している名詞句と「で」の後に続く構成要素の連なりを「で」が結ぶという見方もできるが、(25)のように「で」を削除しても文脈の付加により解釈が可能である点は、「だ」の事例として検討した(16)(17)と同様のふるまいであると考えられる。

(23) 彼一石二鳥だから、それがよかったですよね、1万円ですむってことで。

「名大会話コーパス」下線は引用者

(24) 1万円ですむってことで、彼一石二鳥だから、それがよかったですよね。

(25) 1万円ですむってこと ϕ 、彼一石二鳥だから、それがよかったですよね。

3-6 語彙素を加えないというコンピュータの機能からみた断定の助動詞

Pustet (2003) は、先述したようにコンピュータの3つの機能を挙げた上で、コンピュータの定義を、C) のように示している。

C) In accordance with traditional definitions which are essentially based on the criterion of the semantic emptiness of copulas (see for instance, Hengeveld 1992: 32 and Stassen 1997: 65), the notion of ‘copula’ can be defined as follows: A copula is a linguistic element which co-occurs with certain lexemes in certain languages when they function as predicate nucleus. A copula does not add any semantic contact to the predicate phrase it is contained in.

(Pustet 2003 : 5, 下線は引用者)

C) の下線部‘A copula does not add any semantic contact to the predicate phrase it is contained in. (Pustet 2003 : 5)’という点について検討する。現代日本語の言語運用場面では、(26)の会話のように断定の助動詞の終止形「だ」より連用形「で」の方が選択される場合が多くみられる。

¹² 山口 (2002 : 78) から引用

また、(27)のように形式文脈¹³に支えらえる形で「です」の単独使用が認められることもあり、(27)が成立する。(26)(27)のような事例は、「だ」「で」「です」が述語に何らかの意味的、或いは、語用的機能を与えていると考えられる。

また、日本語の断定の助動詞は活用体系を成すため、同じ体系内で各活用形態が名詞（名詞句）や形容動詞語幹に承接するとき、範列関係（paradigmatic relations）にあることで意味的、語用的機能の入れ替えが可能であると考えられる。(26)のように「で」を用いて文を中止して、言いさし文とした場合は、主語と述語を結ぶことはないが、「だ」を避けて「で」を用いることから「だ」も意味、語用的機能をもつと考えられる。この点においても日本語の断定の助動詞は、コピュラの定義と合致しない。

(26) A：(私たち) 親切な人に助けてもらえてよかったね。

B：本当によかったね。すごくいい人 {で/#だ}。

(27) A：山田先生、長野県出身ですよ。

B：φです。

以上、第3節での検討の結果、①構造と意味の面からみた連結機能、②承接可能な品詞、③語彙的意味の面から、日本語の断定の助動詞はコピュラの定義に合致する点が少なく、コピュラ機能が希薄であると結論づける。

4. 日本語の断定の助動詞におけるコピュラ機能の希薄化の要因

本節では、日本語の断定の助動詞がなぜコピュラの定義と合致せず、コピュラ機能が希薄であるのかについて検討する。

4-1 断定を表す助動詞形態の多様化

現代日本語の断定の助動詞が、コピュラの機能を十分に満たさない要因はどこにあるのか。この問題に関しては、古代語の断定の助動詞とその周辺にある助動詞に目を向けて通時的な視点から考察する必要がある。

まず、古代語における断定の助動詞について概観する。古代語では連体形接続の「なり」が

¹³ 形式文脈とは、同一のセッションの内部で言語的に具現化される発話の連続的な蓄積からなる。原則として、セッション参加者が共有していなければならないものであり、命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の記憶である。その意味では形式性・客観性が高い。ただし、談話記憶内に膨大な量を収蔵しておくとも自然抽出が生じうる。(加藤 2017 : 97)

断定の代表である。山口（2002）によると、中世にはそれと入れ替わるように「である」が形成され、さらに「だ」へと変化した。また、「なり」が「だ」へと変化する過程には「である」「であ」「ちゃ」「だ」という形成過程を経ている（山田 1954, 佐伯 1956, 山口 2002）。先に述べたように、日本語の断定の助動詞は、通時的にみても多様な形態が出現してはさらに音韻変化などをきっかけに形態変化を繰り返してきた。そして、ここに地域方言も関与することでさらに複雑な体系を成すことになる。

佐藤（1990）では、「じゃ（ちゃ）」と「だ」に関して、江戸時代「じゃ」に対して「だ」が役割語的に田舎くささを表していたという記述がある。このことから、中世まで「なり」が断定の助動詞の代表だったのが、近世においては「なり」「である」「じゃ（ちゃ）」「だ」など複数の形態が共時態で共存していたことがわかる。このような状況は、日本語において断定の助動詞と言われる形態が統語的機能のためだけに存在しているのではないことを示している。ひとつの文の内部で主語と述語を結び、文を形成する機能のみをもつのであれば、複数の形態を使い分ける必要もないが、日本語の場合は佐藤（1990）の記述により、複数の形態が共存しはじめた近世から社会言語学的な要因により形態を使い分けていることが窺える。この時点で、日本語の断定の助動詞が主語と述語をつなげて統語的に文を完結させるためだけに存在するのではなく、語彙的な意味をもつ拘束形態素としての素地を形成していくことになったと考えられる。

また、文語と口語の区別も関与している。日本語の場合、名詞述語を形成する言語要素である「なり」「たり」「だ」「である」「です」を単なる連辞関係を成す要素として考えるだけでは不十分で、これらは文体・スタイルの観点から口語と文語に区分される。三上（1972）は、文体について、以下のように述べている。

文語というのは書言葉を、もしくは書言葉のスタイルを指し、口語は話言葉か話言葉のスタイルをさす。自然、文語は古体を保守する傾向があり、口語は新しく動いて行く。これが口語と文語との正しい意味でなければならないが、現在の慣用は正しい意味からまるで外れている。慣用ではナリ体を文語と呼び、デアル体を口語と呼んでいる。

（三上 1972：58）

三上（1972）は、このように解説した上で「デアル」は徹頭徹尾文語であって、私はこれを談話に使う日本人に会ったことがない（中略）「デアル」は山田美妙の時代から文語であり、ただ初期には第二文語であったのが現在では第一文語の地位を占めているという違いがあるにすぎない（三上 1972：58）」と指摘する。三上（1972）による形態と文体の対応を表2に示す。

つまり、日本語では文語か口語かにより形態を使い分けており、特定の形態が口語で用いられることを回避する動機が根底にある。さらに、ある形態を口語で使用するうちに、丁寧さ、

敬意などの要素が加わり、さらなる形態の多様化が生じる。口語として用いられれば、使用の過程で意味用法の変化が生じる。このような現象は、選好 (preference) として説明可能である。選好 (preference) とは、運用に関わる好みのことで、ある言語を母語とする人たちやその社会 (= 言語共同体) で使用に偏りが生じ、これが固着することで文法が作られることである (加藤 2016 : 162)。

現在、日本語の断定の助動詞形態は、コピュラの定義にある「どのような語彙的意味内容も加えない」という制約や、「主語と動詞以外の述語を結ぶ」という統語的な働きが生じる次元から外れて、意味的な次元に存在していると考えられる。すなわち、日本語の断定の助動詞は、意味と語用に関する動機付けにより発展する過程で日本語としての用法上の特徴を形成していったと考えられる。したがって、日本語でコピュラ (繫辞) と呼ばれる要素は、奥津 (1978) が指摘するように、西欧文法の枠組みのコピュラという用語で捉えられるものではない。

表 2 三上 (1972) による文体と形態の対応 (筆者がまとめたもの)

形態	文体
なり	擬古体
である	普通体 (文章体)
であります	丁寧体 (文章体)
だ	普通体 (談話体)
です	丁寧体 (談話体)
でございます	ご丁寧体 (談話体)

中村 (2020) では、通時的観点から「なり」が「だ」へと移り変わる時期を調べた¹⁴。その結果を引用すると、室町時代までは「なり」のみであった断定の助動詞が、「だ」という形態を持つようになったのは、江戸時代のことである。江戸時代は断定の助動詞として「なり」と「だ」が共存しはじめる (表 3 を参照)。「なり」と「だ」を比較すると、「だ」が優勢になるのは大正から昭和にかけてであり、昭和以降「なり」の口語的使用は消失し、その形態が確認できるのは国定教科書においてのみである。「だ」が口語に多く用いられているのは明治以降であるが昭和になるとその使用が減少している点に注目したい (表 4 を参照)。このように日本語においては、江戸時代以降の各時代で断定を表す助動詞形態が複数存在し、その使用の区別が流動的であることがわかる。

¹⁴ 「日本語歴史コーパス」(国立国語研究所) を使用しキーの条件を「品詞大分類助動詞 AND 活用形大分類終止形 AND 語彙素読み『ナリ』『ダ』」に設定して検索した結果から各時代の「断定」を抽出した。

表3 断定の「なり」「だ」の変遷（中村 2020）

断定	室町	江戸	明治	大正	昭和
なり	806	1162	48626	2128	111
だ	0	3906	13118	15673	1860

表4 「だ」文体の変遷（中村 2020 をもとに修正）

文体	室町	江戸	明治	大正	昭和
文語	/	—	457	23	5
口語	/	—	12661	15650	1855

4-2 「なり」と周辺の助動詞からみるコンピュータ機能の希薄化

ここまでの議論で、本稿では現代日本語の断定の助動詞が古代語よりもコンピュータ機能が希薄化していると主張する。そこで本節では、現代日本語においてコンピュータ機能が希薄化した要因について検討する。コンピュータ機能の希薄化を考える上で、「なり」とその周辺の助動詞がどのように体系化されているかを考える必要がある。先行研究で述べたように、連体形接続「なり」が断定を表すのに対して、推定伝聞を表す終止形接続の「なり」がある。(28)『土佐日記』¹⁵の冒頭は断定「なり」と推定伝聞「なり」の使い分けとして示すことができる。「すなる」の「なる」が伝聞推定、「するなり」の「なり」が断定を表す。

(28) 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり『土佐日記』

推定・伝聞の「なり」は、証拠性に基づくものとして記述されている。証拠性を持って成立した認識が推定であると定義すれば、古代語には推定を表す法助動詞として他に終止形接続の「べし・まじ・らし・なり・めり」がある（小田 2015）。小田（2015）は、「べし・まじ」は様相的推定・倫理的推定、「らし」は外部に存在する情報を根拠とする助動詞、「なり」は聴覚、「めり」は視覚に基づく推定であるとしたうえで「なり」「めり」の証拠性と使用される文脈が時代と共に多様性を帯びていることを指摘している。視覚的証拠性に基づく「めり」は（29）であり、聴覚的証拠性に基づく「なり」は（30）である。

(29) かぐや姫の、衣を見て、いはく、「うるはしき皮なめり」『竹取物語』

¹⁵ 日記といえば男性が漢字によって書くものであった時代に、女文字として生まれた仮名を用いて女のわたしも書いてみましょうという晴れやかな書き起こしで、紀貫之が女になりかわって仮名文字の日記を試みた（今野 2007：178）。

(30) 「火危うし」と言ふ言ふ、預かりが曹司のに去ぬなり『源氏物語』

このように古代語では、終止形接続の「なり」「めり」が証拠性にもとづく助動詞として記述され、この体系に連体形接続の「なり」が証拠性を持たないものとして記述される。したがって、中世まで連体形接続の「なり」は、断定の助動詞の意を表す形態として、他に競合する形態が存在せず、断定を表す名詞述語文を形成する文法的要素の地位を独占していたが、近世になり、断定の助動詞形態が複数存在するようになったことで、断定の助動詞には、文法的機能に加えて、意味・語用的機能が付加されることになったと考えられる。このことが、現代日本語の断定の助動詞におけるコピュラ機能の希薄化を進めたと推察される。

つまり、従来は古代語の連体形接続「なり」が周辺の助動詞と証拠性の有無により整理された体系に組み込まれていたため「なり」自体は統語的機能を持つだけで十分な存在価値があった。しかし、近世以降は、断定の助動詞として、統語的に競合する複数の形態が生じたため、断定の助動詞形態が表す意味機能の多様性が進み文体と意味だけでなく、語用的機能も併せ持つようになったと考えられる。

4-3 古代語と現代語のコピュラ機能の相違

前節で古代日本語において、断定「なり」を含む助動詞は、証拠性の有無、証拠性の種類により体系化されていたことを述べた。このような証拠性による助動詞形態の弁別は現代語では衰退する。これに替わるように、現代語「だ」「である」「です」においては話し手の心的態度と助動詞形態の関与が生じている。

例えば、(31)の「である」「だ」「です」どれを選択しても命題内容は変わらない。これら形態の違いは話し手の心的態度の異なりを表す。そして、使用される文脈も同一ではない。また、(32)のように名前を聞かれた際に「山田だ」「山田である」と返答する人はめったにいないであろう。「山田だ」「山田である」には横柄なニュアンスが含まれる。または、「である」が役割語のように働き日常の会話に適さないとも言える。したがって、このような複数の形態が存在するのは各形態の意味機能が異なるためであると考えられる。

(31) 吾輩は猫 {である/だ/です}。

(32) A: お名前伺ってもよろしいですか。

B: 山田 {です/#だ/#である}。

第3節からの検討の結果、本研究では「である」「だ」「です」をコピュラとは認めない立場をとる。一方、断定「なり」は、現代語よりは統語機能中心に働き、コピュラとしての機能を持つと考えられる。また、古代語の断定「なり」が現代語よりもコピュラ性をもつ要因として、

断定を表す形態が「なり」と「たり」のみであり「なり」の使用頻度が高い点で他の形態と範列関係を成さないことを指摘する。

以上により、本研究は古代語の断定の助動詞「なり」は現代語よりもコピュラ機能を持つが、近世以降を境に形成された複数の断定の助動詞形態は意味的、語用的機能を発展させながらコピュラ機能が希薄化したと結論づける。

5. 結論

本稿では、日本語における古代語の「なり」と現代語の「である」「だ」「です」がコピュラの定義と整合しているのかどうかについて検討した。結論を以下に示す。

1. 連結機能との整合性

結論① 日本語の断定の助動詞は、主語と述語を構造的に結ぶとは言えず、統語的連結が中心的機能ではないことにより、一般言語学のコピュラの定義と整合しないことが明らかになった。

結論② 「なり」「である」「だ」「です」は、これを削除しても文として成立し意味解釈が可能である。この点が英語の be 動詞や中国語の「是」と異なる。日本語の断定の助動詞は、主語と述語を意味機能的に結び、述語のみの文においては、先行する文の主語（主題）を指定、または、同定することが可能である。これは、古代語「なり」の指定文の発生に断定の助動詞の欠如があること、また、現代語において一語文が成立することを根拠に結論づけられる。

2. 承接可能な品詞との整合性

結論③ 古代語の断定「なり」はもともと動詞の連体形を承接するほか、近世から明治時代においては、動詞の終止形を承接する。また、現代語においては、東山方言において、動詞を承接する「だ」が残存しており、「です」に関しても用法拡張の過程で動詞を承接する事例がある。したがって、コピュラの定義とは整合しない。

3. 「コピュラはどのような語彙的意味内容も加えない」という定義との整合性

結論④ 証拠性の有無で整理される助動詞体系に組み込まれている「なり」は、推量と断定などモダリティの対立軸で位置付けられるが、語彙的意味を持ってはいない。したがって、意味内容を加えない点でコピュラの定義と整合すると考えられる。しかし、現代語においては、文体、話し手の心的態度、丁寧さや敬意といった社会言語学的

要因を背景に形態の多様化が進み、これらが要因となって、意味的、語用的機能が生じると考えられる。したがって、現代語は、コンピュータの上記定義とは整合していない。

表5は、本稿での結論をまとめたもので、現代語が古代語よりもコンピュータ機能が希薄化したことを示す。「である」は現代語の中で一番古い形態であり、「だ」「です」よりもコンピュータの定義に近似する。つまり、形態が新しいほどコンピュータの機能が希薄化していることを示している。

表5 一般言語学における伝統的コンピュータの定義と日本語の断定の助動詞の整合性

一般言語学の伝統的コンピュータの定義	古代語	現代語		
1. 主語と述語を結ぶ機能	なり	である	だ	です
(1) 構造的連結	×	×	×	×
(2) 意味的連結	○	○	○	○
2. 主語と動詞以外の述語を結ぶ機能	×	○	×	×
3. 語彙の意味内容を加えない	○	×	×	×

本稿では、「たり」についての検討が不足している。この点については、機会を改めて検討する。

(なかむら まいか・言語文学専攻)

参考文献

和書

- 青木博史 (2020) 「第17章『です』の成立」小川芳樹・石崎保明・青木博史『文化化・語彙化・構文化』(最新英語学・言語学シリーズ) (22), pp. 218-227
- 石神照雄 (1994) 「一語文の原理と文の種類」佐藤喜代治編『国語論究4』, pp.68-94, 明治書院
- 今野寿美 (2007) 「歌もことばも使いよう18断定の助動詞『なり』」, 『短歌』(10月号), pp. 178-181, 角川学芸出版
- 大槻文彦 (1897) 『廣日本文典』(全)
- 岡崎正繼 (1989) 「推定伝聞の助動詞『なり』について: その承接と意味」『國學院雑誌』90(3), pp. 1-20
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハウナギダ」の文法: ダとノ』くろしお出版
- 小田勝 (2015) 『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院
- 春日和男 (1968) 『存在詞の研究』風間書房
- 加藤重広 (2006) 『日本語文法入門ハンドブック』研究社
- 加藤重広 (2016) 「第6章統語語用論」加藤重広・滝浦真人(編)『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房, pp. 159-185
- 加藤重広 (2017) 「文脈の科学としての語用論—演繹的文脈と線条性」『語用論研究』第18号, pp.

78-101

- 佐伯梅夫 (1956) 「『にあり』から『である』へ」『国語学』(26), pp. 1-6
佐藤享 (1990) 『江戸時代語の研究』桜楓社
高橋太郎 (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
時枝誠記 (1950) 『中等国文法別記』(口語編) 中教出版
時枝誠記 (1954) 『日本文法：文語編』岩波書店
時枝誠記 (1978) 『日本文法：口語編』岩波書店 (改版第1刷)
中村真衣佳 (2020) 「現代日本語における名詞述語の形態と意味」『国語国文』(155), pp. 62 (左1) -48
永井悦子 (2015) 「第5章助動詞」沖森卓也 (編) 『古典文法の基礎』朝倉書店
橋本進吉 (1979) 『國文法體系論』岩波書店 (第14版)
松尾捨治郎 (1931) 『國文法論纂』文學社 (訂正再版)
松下大三郎 (1924) 『標準日本文法』紀元社
三上章 (1972) 『現代語法新説』くろしお出版
南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
山口堯二 (2002) 「『である』の形成」『京都語文』(9), pp. 74-87
山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』寶文館
山田孝雄 (1954) 『日本文法講義』寶文館 (訂正改版)
渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房

洋書

- Tomiko Narahara (2002) *The Japanese Copula: forms and functions*, Basing stoke: Palgrave Macmillan
Regina Pustet (2003) *COPULAS: Universals in the Categorization of the Lexicon*, Oxfors, New York

辞書類

- 朝日新聞社 『世界の言語』1954, 泉井久之助 (編)
三省堂 『言語学大辞典』(第6巻：術語編) 1996, 亀井孝・河野六郎・千野英一 (編)
小学館 『日本国語大辞典第2版』(第4巻) 2001, 日本国語大辞典第2版編集委員 (編)

用例出典

- 国立国語研究所 「日本語歴史コーパス」・「現代書き言葉均衡コーパス」・「名大話コーパス」『中納言：コーパス検索アプリケーション』<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>